

「未来の若者へ、明日の北海道へ告ぐ!」

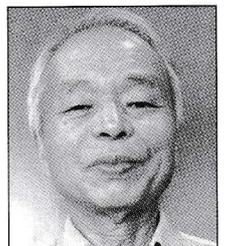
一隅を照らす人になれ!

一人2回連載。

野本流儀、一隅を照らす人になれ! ②

野本 浩一

(JAGA初代会長・ジョークサロン変集鳥)



野本 浩一
(のもと こういち)
1951年長崎市生まれ。
1975年東京大学法学部卒。
同年三菱重工業(株)入社。
名古屋、東京、フィリピン駐在勤務等を経て、2011年会社人から社会人(年金生活者)となる。
ユーモア愛好家とジョークサロン設立。現在は、サロン会報「伝笑鳩」変集鳥。ボードゲーム伝道師。ゲーム講習ボランティアを実践中。お笑いやピートルズ関連本の蒐集・読書も楽しむ。

出逢いを楽しもう

二〇一二年九月二二日に無事に還暦を迎えた時、ひとまずホッとしたことを覚えている。「あー、これで無事に年金を貰える」と安堵したからである。会社同期入社の中には無念にも五十九才で病没した仲間がいた。その時「病氣や事故に遭うことなく還暦を迎えよう」と自分自身に言い聞かせた。無事に六十才を超えたのは健康管理に留意して節制もした賜物だったと思う。

我々世代のアイドルともいえるべき番号3の長嶋茂雄氏が、還暦到達の感想インタビューを受けた時に「いやあ、なんとも言えません。初めての還暦ですから」という有名なコメントがあった。小生にとつても初めてのことであったので、暫し小躍りし続けていた。

そんな余韻に浸っていた誕生日からの九日間が過ぎた十月一日、定年退職となりました。お勤めご苦労さまでしたとの宣告(肩叩き)を受けた。

「やったあ、もう出勤しなくていいんだ。通勤電車の混雑から解放されるんだ。バンザイー」という喜びは無かった。

「エッ、本当に終わりですか。なにか仕

事ありませんか? まだまだ働けますよ。小遣いも欲しいんだけどなあ」との不安が大きかった。

ハローワークに向いて失業保険を受給する手続きに入った。次なる就職口をネット検索する日々が続いた。求人募集の年齢制限を大幅に超過している身には開かれた窓は皆無だった。

公的な資格として普通免許と英検二級しか無い中、とある所へ履歴書を送ったものの「不採用」通知が届いた時は、流石にガクツと倒れてしまった。

定年直後の数ヶ月について「あなたは相当落ち込んでいたわよ」と奥方が述懐しているから隠し立ては出来ない。

保険受給期間が終わった。年金生活をどうすればいいのか。嘆いてばかりでは前へ進めない。会社人から社会人への転換作戦を開始した。

まず当時出回っていた定年関連本を買い求めた。何冊か読むと皆さん同じようなことを書いている。小生が特に気に入って嵌まったのは勢古浩爾著「定年バカ」だった。何故か勢古さん推しとなり彼の著書は今に至るもお読み続けている。

定年本を多読した結果、自分なりの結論を出すのは難しくなかつたと思う。肝心な事として書かれてあることはそれほど多くは無かつたからだ。

ひとつ…とにかく健康管理に留意する。ふたつ…家計維持。小遣いを確保する。みつ…好きなことを見つけて楽しむ。この三点セットに留意しながら、気持ちを前向きに歩み始めたのだった。

現在定年後十三年目に突入している生活を自分なりに振り返ると、健康と家計問題は個人個人の事情があるので別として、「好きなこと」をいくつか見つけることが長生きを楽しむ秘訣になった。子供の頃、自分が何を好きだったかを振り返り、それをしっかりと楽しめばいいのではないかと確信したのである。

現在、小生はジョーク・ユーモアを語らいながら懇談する会に毎月参加することを楽しんでいる。また、ボランティア活動としてシニアの方々や学童保育のジュニアの小学生にボードゲームやカードゲームの講習を行い、ゲームを一緒に楽しむことを月に三、四回実践している。

学生時代の仲間との「昼飲み三千元

の会」に毎月顔を出して、よもやま話をする事も楽しみになっていく。

ジョーク・ユーモアは、子供の頃にテレビやラジオで観たり聴いたりしたギャグや漫才・落語のネタを友達との会話で使いこんできた。ゲームは、小学生の頃から遊んだダイヤモンドゲームやバカンス、社会人になって遭遇したアメリカ発のカードゲーム「ウノ」から今に至っている。サイコロを振ったり、カードを配って遊ぶアナログゲームは、シニアやジュニアに教えるには丁度良いゲームだと納得・痛感している。「のもと先生」と呼ばれて講習を実践できるのは、とても楽しいことである。芸は身を助く、かも知れない。

古稀を過ぎて三年近く経過したが、元気に楽しく過ごせるのもこれまでに出来た人々や書物、出来事を自分なりに大事なものと考えたからかも知れない。

さまざまな出逢いを楽しみ大事にしていけば「人生を楽しむ道を開く鍵」がきっと手に入ると思う。

★提言: 変革、多様性を恐れず、何ごとにも常に「前へ!」という次世代への「タスキのつなぎ方」の哲学が重要である。(本誌編集長/佐藤 公)